

イラン

1984年2月7日14時11分、フランスに亡命していたイランの元将軍（旧王制派の重鎮）がパリの真ん中で射殺されるテロ事件が起きた。

現場は義父の愛弟子で私の

私の履歴書

子 恵 岸

27

戦時下、单身テヘランへ

テロに因縁、元夫の言葉が後押し

友人でもあったピアニストが住む建物の前。その時間に彼女を訪ねる予定だったが、突然の長電話があったので時間に遅れた。もし予定通りに行っていたら、巻き込まれて死んでいたかもしれない。

よる栄枯の残像だった。代わって亡命先フランスから帰国し、イスラム革命を指導したホメイニ師体制下のイランでは黒地に白でプロパガンダを染め抜いた横断幕が翻り、イラクのフセイン大統領の白装束人形が首をくぐられ、木々に吊るされていた。

女性性の肌や髪は男性を惑わす邪淫とされ、黒いスカーフで隠さないと風紀紊乱の罪で警察に連行されてしまう。その日、私はスカーフを被り、長いスカートをはいていた。「ストッキングから肌が透けて見えますよ」

「え？ これは足よ。チョッピリの足」
「チョッピリの足でも女体の一部です。ズボンにはき替えてください」
4月とはいえ、暑い中東の日盛りである。全身蒸れながら想像外の世界を歩き回った。バザール（市場）で見たチャドル姿の威勢の良い主婦たち。金曜礼拝の僧侶による性愛のお説教には落語家も思



チャドルを着たイラン人女性たちと

いつかないほど際どい表現や笑い転げるユーモアがあつて驚いた。何よりもイランの民衆は心優しく親切だった。そんなある日、テヘラン南部にある共同墓地「ベヘシュテ・ザフラー」で異様な光景に慄いた。赤い血の色に染まったと聞かされた。

（女優）

その時、サイレンが鳴り、銃を構えた兵士たちには私は囲まれた。「タグーテに穴に埋葬するのを見て、『殉教すれば天国に行ける』というプロパガンダに殺された若者の最期に胸が詰まった」

な行動に駆り立てた。「自分の目で見て肌で感じる」というイヴ・シアンピの言葉に後押しされ、事件2カ月後、私は单身イランの首都テヘランに降り立った。51歳だった。テヘランの街は未完成のビル群の窓枠が髑髏のように不気味で、巨大クレーンが木偶の坊のように立っていた。それは79年1月に国外亡命したパーレビ国王の近代化政策に替えてください。タグーテイとは西欧化とか、反イスラムという意味だとか……。

った噴水が高々と飛沫を上げている。地雷探知に駆り出されて爆死した少年たちへの供養とのことだった。私はこっそりシャッターを切った。墓地は縁日のように明るかった。顔も体もさく裂した少年の亡骸を棺おけにも入れずに穴に埋葬するのを見て、